
Abhorrence

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A b h o r r e n c e

【Nコード】

N 5 3 6 6 V

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

「他人の愚痴を食べる」という設定の【兎様】というキャラクターを創造し、他人の愚痴を聞く痰壺のようなサイトを運営している「私」。だが、「私」は知らなかった。知らず知らずのうちに、自分の首を絞めていたのだということに。

夏ホラー2011参加作。

牙の生えたピンク色の兎のアイコンが、PC画面越しに私を見据えていた。

カーテンを引いて暗くしてある部屋の中で、カタカタとキーボードを叩く。部屋にはただキーボードの音ばかりが響いて反響する。急ぎたてられるようにして、さらに先、さらに先にと作業を進める。モニター上には管理人である私にしか見えないみんなのコメントが、ずらりとアイコンの下に並ぶ。

『兎様！ 隣の雄二って奴がうざいんです！ どうにかしてください！』。『上司マジうぜえ。兎様、あいつの脳みそ吹き飛ばしちゃうてよ』。『暴力をふるってくる夫に我慢が出来ません。助けて下さい』。『カレシに浮気されました。相手が憎いです。兎様だったら私の気持ち、分かってくれるよね』……。自分の人生に関係のない黒い怨嗟が幾重にも書き連ねられている。貰うコメントはこんなおぼっかりだけど、新着コメントあり という赤文字が浮かび上がるのが何より楽しい。アクセスカウンターだってものすごい勢いで回っている。

私はいつも、やってくるコメントから、色んな人の人生に思いをはせる。席が隣り合ってしまった奴が気に食わず、教室の中でイライラしている高校生。金勘定にうるさい上司に鬱屈しているサラリーマン。ロクでもない男のことを憎み切れずに、浮気相手に怒りをぶつける女の子。嵐のような拳骨を浴びてただ耐え忍ぶ妻。PC画面を隔てて見れば、それはただの情報でしかない。日本のどこかで起こっていること。でも、私には関係のないこと。ドラマ、エンターテイメントみたいなものだ。

私はコメント欄から、書き込みページへと飛んだ。「皆さんの愚痴、確かに頂きましたうさ！ おいしかったうさ！ みんなの愚痴は兎様が飲み込んだよ！ ちょっとは気持ちが軽くなった？」と書

き込んでUPする。すると、アクセスカウンターがとんでもない勢いでぐるぐる回り始める。

私は見られている。日本中のみんなに。

その感覚が、何よりも楽しくて。

暗い部屋の中で一人、私はモニターに表示されている【兎様】のアイコンを指でなぞった。小悪魔にも似た牙の生えたファンシーな兎の姿をした【兎様】は、表情を変えずに私をモニター越しに見据えていた。

【兎様】を作ったのは、ほんの気まぐれだった。

別に何でも良かったのだ。PCさえいじる事が出来れば、そう思い立ったのが直接のきっかけだった。

私はサイト運営をしている。そのきっかけは結婚だった。たまたま好きになった人が古風な人で「家に入って欲しい」と頭を下げられた。カビ臭い考えの人だと半ば呆れながらも、私は少し逡巡したふりをして頷いた。さもあなたのために仕事をやめるのよ、というニュアンスを夫にぶつけながら。けれど、主婦になった私は暇だった。友達は普通に働いているから平日の昼間には電話もつながらない。かといって子供もまだ授からないから、洗い物をして洗濯をして掃除をしてお昼と夕飯の買い物を終えると、どうしようもない暇な時間が私の前に横たわった。その暇な時間の穴埋めに、私はサイト運営を選んだ。独身時代はこの手の仕事をしていたから、運営そのものはそんなに苦ではないだろうし、趣味でやるんだから大変じやあないだろう。そう踏んだ。

ところが、サイトをいざ運営しようとなった時に、私はすっかり困ってしまった。

『サイトというのは、「世間に発信したいもの」が明確にならないと存在価値がない』

大学の頃、私に情報処理を教えた教授の言葉だ。私が情報処理を学んだ頃はPCがようやくよく出回り始めた頃で、興味本位にサイトを

作ったはいいけど持て余す例がそれこそ佃煮にするくらいあった。きっと教授の言葉はそういう『目的なきサイト』の林立を受けての発言だったのだろう。けれど、そんな自明のことがまさか数年後の私に降りかかってくるとは思ってもみなかった。

私は無趣味だ。好き好んで何かをするということがない。PCをいじるのが好きだから、もしかすると趣味はPCということになるのかもしれないけど、サイト運営をするにあたって「PCをいじる」というのは手段であって目的ではない。手段が好きなのに、目的が見つからなかった。

どうしたらいいんだろう。

頭を抱えた私を救ったのは、夫だった。

夜になって家に帰って来た夫はネクタイの結び目をほつきながら難しい顔を浮かべていた。

「まったく、うちの後輩どもはなつてないよ。親の顔が見てみたいもんだ」

鞆を受け取って胸の前で抱えながらその愚痴を聞いていた私に、何か閃くものがあった。

そうだ、これだ。

別に発信なんてする必要はない。待ち構えていればいいのだ。誰しもがジャーナリストであり作家であるこの時代、誰も彼も何かを発信したいはずだ。しかし、発信したい人間が必ずしもその手段を持つているわけではない。それに、わざわざ場を作って発言する必要のない情報だってある。そういうニーズを拾い上げるサイトだったらどうか。

夫の愚痴を聞いているうちに、サイトの構造が決まってくる。

頭に浮かんだのが童話「王様の耳はロバの耳」だ。王様の耳がロバの耳であることを知った床屋さんが、地面に穴を掘って、口止めされた秘密を穴に向かって発散するあれだ。あの穴のようなサイトになるう。愚痴や鬱憤を書き込んでもらう、遣る方ない思いのゴミ捨て場のようなサイトを作ればいいのだ。

一つピースがハマれば、あとは流れのままだった。穴に向かつて愚痴を吐き出して下さい、じゃあ捻りがない。そこで私はちよつと捻った考えを出した。愚痴や鬱憤を食べる架空の生き物を設定してやり、見る人が餌として愚痴や鬱憤を書き込む形にすればいい。もちろん、書き込みは管理人である私にしか見えないようにすればいい。そして一日に一回、その架空の生き物に扮して、私がなにかコメントを書き込んでやればいい。

そうして【兔様】は誕生したのだ。

人には誰にも言えないことがある。色んな思いを隠して生きている。もちろんそれを知らぬではなかったけれど、サイトの盛況を受けて、私は改めて人間という生き物の持つ闇のようなものを味わった気がした。

新着コメントあり の赤文字がページの上部に浮かび上がった。その文字をクリックすると、PC画面がコメント欄に切り替わった。

そこには、こう書かれていた。

「絶対に、お前のことを許さない」

たった一行。

うん？ 私は首をかしげた。

このサイトのFAQには「愚痴や鬱憤を晴らしたい相手の名前を明記のこと。じゃないと愚痴つても楽しくないでしょ？」と書いてある。中にはもちろん怒りの感情に負けたのか、FAQを無視した書き込みが入ることがある。だが、その手の書き込みは大抵が支離滅裂でとても読めたものじゃない。

それと比べると、この書き込みには暗い森の中のような静けさとある種の深刻さが滲んでいる。その書き込みの背後に控えているのは、恐ろしく深く昏い敵意。

この書き込みに言う「お前」とは誰のことだろうか？ 私は考えてみた。けれど、すぐに考えるのをやめた。

そんなの、分かりようがないからだ。

設定では、【兎様】は人の愚痴や鬱憤を飲み込むことになっている。だが実際には違う。ただ眼を通して放置しているだけだ。最初こそ気が滅入ったけれど、慣れてみればなんといいほどのものでもない。だって、私はそれらの愚痴を飲み込む必要なんてどこにもない。飲み込んだかどうかなんていうのは向こうには分からない。向こうだって、ゴミ捨て場、痰壺のつもりでこのサイトを利用していいのだろう。だから私も、どこかせせら笑いながら投稿されてくる愚痴を聞き流している。

しかし、そんな心の眩きすら、また浮かび上がった 新着コメントあり の表示に遮られた。

クリックすると、いつも通りの愚痴が並んでいた。どうやら、いくら叱りつけても子供が勉強をしないらしい。そんなどこか牧歌的な愚痴を笑い飛ばすうち、また 新着コメントあり の表示が浮かぶ。

最近、多いなあ。

私は心の中で呟いた。

こここのところ愚痴の投稿数が増えている。愚痴、と言っているのかも分からない。時折、『あいつを殺したい』とか、『あいつが骨を折りますように』とか、『あいつを蹴落したい』といった相手の不幸を願うような愚痴も増えている。以前はさつきみたいな牧歌的な愚痴が多かったのに。

客層が変わっている？

もしかすると、どこかで紹介されているのかもしれない。こういうサイトは、影響力のあるサイトの紹介で来訪者が増える場合が多い。調べてみるか、と検索エンジンの初期画面を開いた。

と、その瞬間にタイミングよくケータイのアラームが鳴った。

ふと見ると、壁にかかる丸い時計は午後五時半を指していた。

あと一時間もすれば夫が帰ってくる。それまでに夕飯の支度をしないとならない。

とりあえず調査は次の日に回すことにした。私はパソコンの前から立ち上がると、リビングダイニングの真ん中に立つテーブルの上に広げられている緑色のエプロンを拾い上げた。そして胸の前にそのエプロンを当てると、私は台所に立った。

その次の日、検索エンジンを使って調べてみた。

思いのほかすぐに見つかった。やっぱり他サイトの紹介があったのだ。

しかし、その紹介のされ方に、私は苦い思いでいっぱいだった。そのサイトは、いわゆるオカルト系のリンクサイトだった。全体に黒っぽいレイアウト、そして血を意識しているのか赤い字でテキストが書かれている。そして、メインコンテンツであるリンク部分には有名な霊能者のHPへのリンクや、某新興宗教団体へのリンクが所狭しと並んでいた。その中に混じって私のサイトへのリンクがあった。そしてそのリンクの下には、このリンクサイトの管理人によるものと思しき煽り文が添えられていた。

『このサイトは、人の愚痴や鬱憤を飲み込むモンスター、【兔様】がいるサイトです。でも、ここを見ている皆なら知っていると違いますけど、これってよくある悪魔の召喚方法ですよ。もしかすると、このサイトで新たな悪魔が登場するかもしれませんよ（笑）』
どういうこと？

そのサイトは只のリンクサイトではなかった。古今東西のオカルト的なものについて、入門程度にまとめられたWIKIページがあった。そのページを開いて、【悪魔】の項目を調べるうちに、ある小項目が私の目に止まった。

それは、【悪魔の作り方】なる項目だ。

人間は様々な理由で悪魔や鬼などの使役可能な人間ならざる者の創造を夢見てきた。そして、それら人間ならざる者の創造に関して、古今東西さまざまな方法論が残っている。もちろん異同はあるが、その基本的な部分是不思議と似通っている。要は、その人間ならざる者の容れ物となる形代（人形などのこと）を用意し、それに強い

念を封じ込め続けることである。

は。何言ってるの？ 私は鼻を鳴らした。

そんなわけがない。

そもそも、私の【兎様】は、そもそも悪魔の作り方なる方法の要件を満たしていない。だって【兎様】には「形代」なるものが存在しない。【兎様】はあくまでアイコンと文字の羅列という形のないものによって出来ているものだ。

ただ、迷惑だ。

こんなおどろおどろしいサイトにリンクを張られている。それが不快だった。だって私がやっているのは人の愚痴を受け入れることであって、こんなオカルトじみた迷妄を拡散することじゃない。

私はそのサイトのメールボックスにリンクを外してほしい旨のメールを投げ込んだ。

この手のサイトにしては意外に反応が早く、その日のうちに私のサイトへのリンクは切れていた。このリンクサイトの管理人さんからのメールには、勝手にリンクしたことを心から謝る旨、そしてリンクを外した旨が丁寧に書かれていた。

満足した私は、その日の作業をこれで切り上げた。

しかし、次の日になっても客層に変化がなかった。

以前までの緩い愚痴は形を潜め、逆に増えたのは強烈な愚痴だった。いや、これはもう愚痴と呼ぶべき性質のものではない。「あいつを殺してくれ」、「死んでくれ」、「ぶっ殺す」、「いつか腹を割いてやる」……。これはもう愚痴ではなくて、明確な意思のように思われた。どうやら、あのオカルトリンクサイトから辿ってきた客が、このまま常駐しているらしい。

けれど、私にとってはある意味これも無関係な他人の心象風景に過ぎない。それに、ここの書き込みは、管理人である私にしか見ることのできないものだ。最近ではネット上で殺害予告を書き込んだ人間は捜査対象になるらしいけれど、このように殆ど誰にも見ることのできない殺害予告なんて意味を成さない。

これも、この客なりの愚痴なのだろう。

そう思い直して、私は一日一度のコメントを書いた。

しかし、こんな面々より、むしろ心配の種があった。

それは、あのオカルトサイトの言葉を鵜呑みにして、【兎様】を悪魔に仕立てようとする連中だ。『兎様！ 我々の願いを受け止めて、さあ、画面の中から現れて下さい！』、『あともう少し、あともう少し言霊を浴びせ続けければ、兎様もこちらに現れよう』というコメントがつくようになった。

全く面倒だ。

だが、私はそれらについても無視を決め込んだ。一日の終わりに、皆さんの愚痴を飲み込んだ、という内容の更新をテキスト上にUPして、その日の作業は終わる。つもりだった。

その瞬間に、新着コメントあり の赤い文字が浮かび上がった。コメント欄に飛ぶと、こんなコメントがあった。

『お前が殺したんだ。お前のせいだ』

気味が悪くなりながらも、私は改めてその日の作業を打ち切った。

その日の夜の夕飯時、差し向かいでご飯を食べていた夫がぼつりと呟いた。

「なんだか最近物騒だなあ」

何が？ そう訊くと、夫の丸顔に驚きが滲んだ。

「え、ニュースとか見てないの？」

夫は電源の入っていないなかったテレビをつけて、ニュース番組にチャンネルを合わせた。

丁度、事件のニュースをやっているところだった。

深刻そうな顔を浮かべた女性キャスターが事件のあらましを読み上げるところによると。昨日、某県に住む私と歳の変わらない主婦がその夫を惨殺したらしい。もつとも、その夫、家庭内暴力が癖になっていたらしく、常々その主婦を殴りつけて怪我をさせていたらしい。ニュースの論調も、犯人の主婦に同情、ないしは『なぜ

行政がこうなる前に手を打てなかったのか』と、地域のコミュニティの空洞化に警鐘を鳴らすという陳腐なものだった。

とはいっても、こんな事件、日本中どこにでもある事件だろう。「でもさ、この奥さん、事件の時のことを覚えていない、って言うてるらしいんだよね」

テレビの中のキャスターは、夫と同じことを言い、さらに補足を重ねた。

犯人は、『巨大な怪物にそそのかされた』などと支離滅裂なことを供述している、と。

そういえば、昨日もこんな事件があったよな。副菜のソボ口煮をつまみながら、そう夫は言った。

覚えている。あの時も夫と一緒にニュースを見ていた。高校で起きた殺人事件だ。犯人は、どこにでもいるような目立たない男子学生。被害者は、その男子学生の隣の席に座るクラスメイトだったらしい。たびたび、カンニングや金銭の要求を犯人の少年に迫っていたらしい。それで勢い余って……。その件についても、犯人は自分の犯行であることを否認して『あれは俺がやったんじゃない！あれは化け物がやったんだ』と供述していると伝えられ、ニュースのコメントータたちは「これだからゲーム脳は云々」と顔をしかめていた。

「まあ、物騒な世の中だよな。気をつけないと」
曖昧に私は頷いた、と思う。

次の日、いつものように 新着コメントあり の文字が浮かんだ。けれど、このコメント欄に投稿されているコメント数を見て、私は目をみはった。いつもだったら一日放置してもコメントが十件いくかいかないかというところなのに、この日は三百件に達そうとしていた。

慌てて開いてみると、コメント欄の空気は混迷を極めていた。

大きく分けると、コメントの種類は三種類あった。一つは今まで通りのささいで小さな愚痴を残すコメント。二つ目は、『あいつを

殺してやる』などの重いコメント。そして最後の一つは。
『お前を絶対に許さない』、『人を殺しておいてなぜお前がのうとうとしている』、『いつになったらお前のところに【兎様】が現れるんだ』……。

この頃には、既に私にも分かり始めていた。この種類の人たちの言う『お前』というのが、私だということに。

そして何より、寄せられるコメントのほとんどが、架空の存在であるはずの【兎様】を实在のものであると信じているものが多いように思えてきた。それは、ささいな愚痴を残す人たちも、過激な言葉を残す人たちも同様だった。ささいな愚痴を残す人ですら、『【兎様】、聞いて？ 今日もカレシと喧嘩しちゃったの』と、人格を持たず存在しない【兎様】を意志ある存在として語り始めている。不意に、あのオカルト系リンクサイトにあつた言葉が蘇る。

形代に、念を込めることによつて悪魔が誕生する

馬鹿な。

頭を振つてその言葉を頭から追い出した。この日は市役所や郵便局に行く用事があつて、サイトの運営はほとんどできなかった。夜になって夫が寝静まつてからやるう。そう決めて、私はPCの前を後にした。

夜、真つ暗な部屋の中で、私はPC画面を睨んでいた。

この日は結局、総数五百件もコメントが来た。そのコメント一つ一つに目を通すのも骨が折れた。しかも、そのどれもが、【兎様】の来訪を願うモノばかりだった。いや。それだけじゃない。中には、こんなコメントすらあつた。

『あいつを殺してくれて、ありがと！』

え？

そんなわけがない。【兎様】が人を殺すはずが……。だって、【兎様】は何処にも存在しないはずなのだ。

そして、公然と私のことを批判するコメントもあつた。神父を名

乗る人物からのコメントだ。

『このような悪魔的なサイトを運営するなど神のご意思に反する行為。悔い改めよ!』

その末尾にはあるサイトへのリンクが張ってあった。こういうコメントに張り付いているリンクは本来踏むべきではないのだけれど、何かに追い立てられるようにしてそのリンクをたどった。

そこは、【兎様】を奉る有志サイトだった。『嫌な奴を殺してくれる凄いい神様・兎様』と銘打たれ、【兎様】誕生祭』、【兎様】の哀れなる犠牲』などと色んな項目が並ぶ、やはり黒と赤を基調にしたおどろおどろしいサイトだった。私は慌てて『【兎様】の哀れなる犠牲』なる項目を開いた。そのページには、色々な人の名前や事件の名前が並んでいた。ここ一カ月ほどの行方不明事件や殺人事件、不可解な突然死などの死者が並んでいた。そのページを閉じて最初のページに戻ると、このサイトの一番上に、私のサイトへのリンクが張ってあった。

ようやく私は気付いた。

確かに【兎様】なるものは存在しない。けれど【兎様】を信じ奉る人間は存在する。そして、彼らが私のサイトに他人への悪意を書き込んでいく。それはさながら、藁人形に呪詛の言葉を投げつけ続けるのに似てはいないか。サイトという形なきもの。けれどここにはコメント欄という他人の呪詛を保存しておく場がある。それら悪意が積み重なり増幅されて……もしかしたら。

それに気付いた、その瞬間だった。

あたり。

そんな細かい声とともに、私の頭に激痛が走った。

頭を抑える。ふと掌を見ると、画面に照らされた私の掌には鮮血がしたたっていた。

なにこれ？　なんで？　何で私の元に？

私は気づいた。

このサイトのコメントの中に、いくつも私に呪詛を飛ばすコメン

トがあつたことに。

私は【兎様】を通じて、色んな人の恨みを買ったのかもしれない。そして私は皆の悪意に押し潰されるのかもしれない。蟻んこのように。

振り返った私の後ろには、鋭い牙を持ち大きな耳を持つ化け物が、虚ろな存在感をまといながら確かに屹立していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5366v/>

Abhorrence

2011年8月9日03時19分発行